

私にとって、銀座で作品を“発表する”ことは、銀座で作品を“つくる”ということ。色鉛筆と紙で街のあらゆるものを写し取る、フロッターージュという造形技法で作品をつくっている私は、2007年、銀座のINAXギャラリーで展覧会を開くにあたり、「銀座フロッターージュ計画」に取り組むことになった。銀座の店の中をフロッターージュさせてくださいとお願いして回るという、まさに銀座に体当たりで臨んだ制作が始まった。

交渉して回ったのは、銀座の顔とも言える多くの海外高級ブランドを含め、あらゆる店舗。しかし店舗といっても先祖代々同じ場所で大事に営まれている個人の店もあれば、巨大な有名企業やホテル、劇場、百貨店もある。その対応は千差万別で、即日許可をもらえるところもあれば、交渉から社内での役員会議を経て3ヶ月後に決まるところもあり、当然受け入れてくれると思ったところが、全く相手にしてくれないということもあった。しかし考えてみると、見ず知らずのアーティストが突然、店で作品をつくらせてほしいと不思議なお願いをするのだから、面食らうのも当然だ。

それでも銀座は、私を快く受け入れてくれたと思っている。結果的に私を受け入れてくれた店舗のほとんどは、長く銀座に店を構えている老舗ばかり。つまり銀座を誰よりも愛している人たちだ。銀座は、これまで時代の流れをさまざまに受け入れながら、確固たる“銀座”を守り続けてきた。私一人の勝手な依頼も簡単にのみ込み、どんなものをつくるのか試しているのかのような、どっしりとした懐の深さを銀座という街に感じることができた。

フロッターージュに潜む物語

中でも一番印象的だったのが、ホテル西洋銀座。私の突然なこの申し出に対して、スタッフ全員が自分たちのホテルを改めて見直し、歴史を象徴する大切な場所はどこかと話し合ってくれたのだった。半年間銀座に通いつめ、145の店舗や企業に交渉して回り、こうした対応をしてくれたのはここだけだ。大抵は、自分が下見をして擦る場所を決めるのだが、作品の趣旨を理解してもらい、皆の合意のもと候補を出してくれたので、私自身も納得して作業をすることができた。所有者もつくってほしいと思うものを一緒につくるといふ、最も理想的なかたちとなった。そういった作業が銀座という街でできるということが驚きであったし、何とも言えない気持ちが温まる思いがした。

写し取ったのは、正面玄関の大理石の床。ここは、ホテルに入るときに、お客様が最初の一步を踏み入れる場所であり、そして帰る際も必ず通る場所のようだ。その往来で、1カ所だけすり減ったところがあった。その作品は、ホテルの経営母体が変わる節目の年に、象徴的に扱ってくれ、現在はフロントのスタッフから見える正面の壁に飾られている。その場所もホテルで話し合っていて決めた。なんとも作家冥利に尽きることだ。

もう一つ印象に残る場所として、明治創業で浮世絵などの木版画の版元として知られている渡邊木版美術画舗がある。3代目の社長が店内にいたので、直接交渉をした。すると、おもむろに1枚の版画を私の前に差し出した。それは、あの葛飾北斎の代表作『富嶽三十六景』の通称赤富士と呼ばれる浮世絵だ。「これ、やってみる

か？」と逆に提案されてしまったのだ。考えてみると私がやっている作業は、凹凸に紙をあてて、上から色鉛筆で、実物の色に近づけて擦る。一方、木版はその逆で、凹凸面に見本の画と同じになるように調合した顔料をつけて、その上に紙を載せて擦る。つまり、どちらも見本はあるが、私はこの版木の表面につけた摺り師の顔料を見本に作品をつくった。

摺り師が作業を行っているその脇で、北斎浮世絵の版木をじかに擦る。ピンと空気が張り詰めた作業場で、しかも細かい彫りの入った版木を扱うのは、かなり緊張した。彫り師が彫った線がなんと繊細で美しい。思いもよらない体験だった。社長が、同じ美術を生業としている者として私を見てくれたことが何よりうれしかった。そうでなければ、突然やってきたアーティストと名乗る人間に、店の大事な版木を渡すはずがない。来るものを拒まず、受け入れ、それを逆に面白がるような洒脱さをも感じた。

現在の銀座

銀座をめぐったこの作業から早5年が経つ。当時制作した場所で、もう二度とたどり着けない場所がある。かつての歌舞伎座、小さな鞆屋銀盛堂、昔ながらのタイガー食堂から道端の郵便ポストまで、先日たどってみると、なんと16カ所も作品として制作したものがなくなっていた。

古い建物には時間や記憶が宿っていて、人のざわめきや気配までもが空間に潜んでいるように感じる。それはもう既にただの建物ではなく、人の愛着ある所有物に変わることなのだと思う。銀座にはそんな建物が多い。そこには、人が手入れをしながらも大事に使い続けてきた温もりがある。最高級が似合う銀座という街は、新しいものを追い求める消費者の欲求よりも、その人に合った、その人のための最高級の品物を提供してくれる街なのだと思う。だから、建物や店も昔から通っている人が多く、またそうした人を大切にしている店が多いのだ。それが、世代が変わっても銀座が愛される理由なのだろう。

しかし最近、銀座を歩いていると、古いビルが軒並み解体されてそのまま放置されていたり、駐車場になってしまっていたりする物件に多く出くわす。私が写し取りたいと思う大切に扱われてきた場所、あるいは私を受け入れてくれる場所がどんどん減っていると思うと寂しい。物がその場所にあり続けることで、日常に隠れていた予期せぬ美が見えてくる。美しさは、飾ることではなく、磨くことにあると思う。見た目の飾りにばかり気をとられずに、銀座を大切に、愛着を持ってフロッターージュのごとく、撫でさすように磨いていきたい。